

科学ディベートを 体験して

農業技術研究機構理事長
つくばサイエンス・アカデミー理事
三輪 睿太郎



見方、思想、仮説の相違、拡がりをもつ科学者間のディベートは科学の進歩に貢献するが、理解度に差がある（誤解、誤認、無知、曲解）者が入り乱れての「非科学者」を交えた「科学ディベート」は無意味ではないかと思っていた。しかし、「遺伝子組換え作物、遺伝子組換え食品 Yes or No」を体験して、そう決めつけることもないかと思いはじめた。

科学者といえども異専門分野に対しては非科学者と同等なので、科学者のみのディベートでも無意味・不毛のディベートになることがあるではないか。ただし、こうしたディベートがよい成果を生み出すためには、時間を惜しまず討議を繰り返し、次第に理解差が埋められてゆく経過が不可欠だ。筑波大学の中国人留学生は、「GMO」にYESの発言をしたあと、「もっと、時間が必要だ」と漏らしていたが、このディベートに初めて加わる人は同様な印象をもつだろう。しかし、このテーマについては、これまでいろいろな場で、膨大な討議が行われており、

すでに、パネラー、会場の発言者の理解差は相当程度に埋められていたことを指摘しておきたい。おかげで理解差ではなく、意見、ものの見方の違いに基づく討議になった。

パネラーにはいずれも適切な方が選ばれ、一部の方とはもっと議論をしたいなという思いがした。論点の設定、司会の運びも適切で、限られた時間のうちに参加者が考え、学び、自らの論点を得たのではないか。

パネラーから「減反は悪魔の政策」、会場から「自給率向上政策との関連性」、「あなたは食べますか？」などの発言が出たように、GMOのディベートは科学にとどまらず、もっと大きく重い政策、産業、生活の問題としてのディベートを誘発する。環境、原子力問題も同様であろう。これからの「科学ディベート」の重要なテーマには、こういうことを避けてはいけないものが多いのではなかろうか。科学者のアカウンタビリティの重要性を改めて認識した次第である。

みわ・えいたろう

これまで、20年は土壌学、肥科学、環境科学の研究に従事。複雑な事象をマクロ、ミクロにシステム化して法則性を見いだすことに熱中。後の17年は技術・研究行政に従事。農業関係の研究機関を大統合して生まれた独立行政法人「農業技術研究機構」を率いて、Creativeな仕事をCompetitiveに行いConcentrativeな成果をあげるClearでCollaborativeな研究体制の創造に意欲を燃やしている。59歳。つくばサイエンス・アカデミー事業推進委員会農業科学部会長。